

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別敦承登録証）第三五二号
昭和四十六年九月二十五日印刷 昭和四十六年十月一日発行



第三十七卷

第十号

1971

10



十 月 号



一 目 次

表紙「富士の初雪」松寿達文画

お参りしない仏壇……………	石 井 真 峯…………	(2)
二つの歌碑〈下〉……………	岸 信 宏…………	(4)
阿弥陀経意識……………	吉 田 定 久…………	(8)

特集「経済と仏教」

法然上人の経済思想……………	友 松 円 諦…………	(10)
経済と仏教……………	田 中 経 人…………	(13)
仏教と経済行為……………	中 原 直 治…………	(17)
有信有業の生活……………	大久保 文 雄…………	(18)
昭和法然上人伝 女人往生・法然上人の健康……………		(20)
浄土歳時記《かんなづきの巻》……………	若 林 隆 光…………	(22)
孝子善之丞物語③……………	吉 田 光 覚…………	(24)
十夜法話……………	山 本 禄 瑞…………	(26)
「道」黒谷への道……………	高 橋 良 和…………	(29)
浄土宗の古刹を訪ねて(金戒光明寺)……………	田 中 祥 雄…………	(32)



語 和 声 念

＜不 動 心＞

この頃、日本をめぐる国際情勢の動きは、まことに目まぐるしい。波乱万丈というところである。戦争でベシヤンコになった国が、二十五年後には世界で一二を争う経済大国になったのであるから、世界も騒ぐわけである。しかし、何も人の金を盗んだわけでもあるまいから、世界が騒ぐからと言って恐れることはあるまい。勤勉な日本人の努力の賜なのであるから、自信を持って、堂々と対決したらよいのである。

日本人にはともすると右顧左眄するところがあっていけない。外交などでも自主性がなと言われるのもその一例である。それにこの頃ではマスコミが発達しすぎて、世界の問題が直接茶の間に入ってくるので、猫も杓子も一緒になって騒ぎ立てる。そのくせ何も分っていないのだから、手に負えない。もう少しどっしりと構えて、経済大国らしい度量が欲しいものである。

中国の孟子が不動心ということを説いている。不動さんのように、どっしりと落ち着いて物事に処していけというのである。この不動心を得る方法を尋ねられた孟子は

「われ善くわが浩然の気を養う」

と答えた。この浩然の気というのは、彼にいわせると至大至剛なものであって、何事にも動ぜず、まっ直ぐに進むエネルギーのようなもので、やがてそれは天地に充滿して、すべてのものはこの気なくしては動かなくなるほどの正義の力となるものであると説明している。

われわれの先輩達も、この浩然の気を養うことに努力し、出処進退の源動力としたものである。経済大国となった日本人として、今ほどこうした浩然の気の必要なときはないのであるまいか。そして、自から信ずるところに従って堂々と行動すべきであらう。目の前のことにばかり気を取られていると、それこそ地獄に落ちてしまいかねまい。(安居)

< 一 >

昭和二十年の終戦後間もなく私の住んで居る富士宮市の助役から、私がかつてアメリカに数年留学した経験があるので、市民にアメリカの事情を聞かせてくれと頼まれ、数ヶ所で一般市民に話をすることがある。何を話したかはよく覚えていないが、アメリカは実によく機械を使う国で、たとえば自動車でも、三人に一台とか五人に一台とかある。洗濯も洗濯板でゴシゴシ洗うことなどせず、電気洗濯機を使って労力を省く、すべてそういう調子であったことを記憶しているといった。日本も少し無理な戦争を長くやり過ぎたというようなことも話したことは今も覚えている。

< 二 >

ところがこの十年くらいの間に、日本はすばらしい経済発展を遂げ、電気洗濯機はだい

お参りしない仏壇

——大本山光明寺法主——

石 井 真 峯

ぶ前から各戸にあり、最近はこの家にも車の一台や二台はあり、カラー・テレビも各戸にあるという驚くべき程生活が変つて来た。旅行にも一年数千万人がゆき、消費する金も億の単位だということである。

ところが困つたことにそれに比例して人間が前より少しでも親切になつたか、争いがなくなつたか、お互いに国のことを思い、社会をよくしようという精神が強くなつたかという残念ながら、そうではない。いよいよ自我的(例外はもちろんたくさんあるが)になり、我がまま勝手の振舞いが多くなり、騒々しく、平和日本などとは言えそうもない。一体どこに原因があるだろうか。

< 三 >

ある外国青年が日本研究に来て日本人の家庭に滞在した。若夫婦が母屋に住み、老夫婦が離れ家に住んでいたが(これは一般とは逆

な感じがするが、母屋の仏壇を見て驚嘆し、日本には家の中に教会があると国元の両親にそのすばらしさを報告した。ところが幾日経っても老若の夫婦が一度もこの家の中の教会（仏壇）に参詣することがないので二度びっくりしたという実話を聞いた。

一体この話が何を意味するかをじっくり考えてみる必要がある。結論からいうとこの家には立派な仏壇（何宗か不明である）があっても仏教の教えとは全く関係がない。仏壇は今是一種のアクセサリーに過ぎないのではないか。ここに私は問題があると思う。離れ家に住んでいる両親夫婦は五十歳を越しているか、或は六十歳台の人かも知れないから、一度も仏壇に参詣しないということのは不思議である。しかしそういうことになったについてはわれわれ寺の住職者にも責任があると思われる。もちろん私も例外ではない。教化活動をやっていると自分では思っている、それは結局檀信徒にしっかり理解されていない結果をもたらしているのではあるまいか。



いわばかゆいところへ手が届かないようなところがあるのではあるまいか。宗門大学のありかた、布教のありかたにも何か欠けているところがないだろうか。

< 四 >

私の住んでいる富士宮市に貿易研修センターがある。余り世間に知られていないが、政府が十五億円、民間大会社等が十五億円出資して二十万坪の広大な山麓にすばらしい設備の全寮制のセンターがあり、大学を出て大会社に就職し三、四年の経験のある者百二十名を割当て募集し、日本人教授よりも英米その他各国の教授の方が多く、修了前に教授が付き混って海外研修をして来る。一人にかける十カ月の費用は二百万円と聞く。会社の幹部養成機関である。真似の出来ないことであるが、これまでにして幹部の養成に力を入れていることは参考にするべきではなからうか。



二つの歌碑

— 生家の歌碑 —

浄土門主 岸 信 宏

私の生家は愛知県中島郡平和町法立（ほうりゅう）にあります。私の幼少のころには、左右川村（そうがわむら）といいました。郷里では小学校一年だけを修了して、九歳の時、僧籍にはいることとなり、始めは三重県一志郡美杉町（以前は伊勢地村）石名原の観音寺という寺へ参りましたが、因縁がなく三ヶ年の後、十一歳の時、和歌山県西牟婁郡西ノ谷村（現在の田辺市元町）浄恩寺に参り、藤田善信師に就いて教養を受けることとなりました。

今から思えば、随分厳格なる薫陶を受けました。県立田辺中学校を卒業し、明治四十年四月に上京し、浄土宗立の宗教大学に入学したのであります。この学校は浄土宗大学といっ

ていたのですが、この年に学制改革が行われて宗教大学となつたのであります。浄土宗大学の時代は全国が八大教区に分かれ、各大教区に一つの教校があり、その教校を卒業して浄土宗大学に入学することになっていたのであります。和歌山教区は第六大教区に属し、その所属の教校は大阪にあったのです。私は田辺の普通中学を卒業したら、大阪の教校で一ヶ年間、宗学ならびに一般仏教学の補習教育を受けて、浄土宗大学に入学する予定をおったのですが、幸に中学を卒業した明治四十年に浄土宗の学制の变革があつて、普通の中学からも、すぐに宗教大学の予科に入学することができるようになったのであります。私は宗教大学の第一回生として入学

し、予科二年、本科三年、研究院三年の学業を卒えたのであります。



明治四十年頃、紀州の田辺から東京へ行くのには、田辺の港から大阪商船の汽船で大阪の安治川口の上陸し、大阪駅から東海道線の汽車で東京へ行ったのであります。その時分はまだ急行列車というものはなく、各駅停車で参りました。その往復に私は郷里へ立ちよることにしました。私は十一

歳の明治三十二年に紀州の田辺の浄恩寺へ小僧に行つてから、十九歳の明治四十年四月に宗教大学に入学するために東京へ行くまで、一度も郷里へ帰ったことがありませんでした。

初めて東上の際、東海道線の国鉄尾張一ノ宮駅で下車し、私鉄の尾西線にのりかえ、森上という駅で降り、荷物もありますので、人力車にのつて、そこから一里ほどの道のりのある郷里の法立の実家へ参りました。それはもう夕暮近くでありました。途中で出迎えに来て下さった父に会うことができました。その当時、紀州の田辺から汽船にのり、汽車にのり、発着の時間を正確に通知する方法がなかったためかと思われませんが、父から「お、義雄」かと声をかけられた時には、今は記憶も薄れましたが、感激そのものであったと思われまゝ。義雄とは私の幼名で、今の信宏という名前は大学の本科二年の時に、伝通院で加行（けぎょう）をして、勲息義城上人から宗戒阿脈の相伝を受ける前に、願書を出す時に改名したのであります。

生家に帰って父母や兄弟や、親戚の人々と挨拶を交わしても、幼い時から十ヶ年程郷里を離れていましたから、紀州の方言と尾張の方言とによる挨拶では、その意味はわかるにしても、何だか外国へでも来たような感じがしたのであります。

す。それから学校の春休み、夏休み、冬休みに紀州と東京とを往復する度に郷里に立ち寄ったのであります。その度ごとに私の心の中に深く印象づけられたのは、母上の信心深いつましい姿、お念仏を口にたやさない姿でありました。私の郷里附近は東本願寺のいわゆる尾張門徒の中心地ともいうべき所で、朝夕の勤行をはじめ、お寺や在家で開かれる法座の開法は、近い所であれば欠かしたことがなく、真宗の安心の領解（りょうげ）の深いことには驚くほどのものがありました。毎朝お仏壇に供えるお仏飯は特別の鍋でたき、そのお下りは四、五日分ためておいて、それをたきなおして自分でたべるのですが、その時には決してなまぐさいものを一緒にたべなかつたのであります。

母は岸家の第二の分家から、本家の養子に縁づき、私の兄をもうけたのですが、主人が早く亡くなりましたので、土地の旧家である杉村家から私の父を迎えて、第三の分家を作り、私はその長男として生れたのであります。長男は普通はその家の家業を継ぐのが一般の習わしであります。その習わしを越えて私を出家の身分とせしめたところには、尾張門徒として、仏教信者として、両親、殊に母の信仰の喜びがあったのではないかと思うのであります。

私が今日あることを思う時、いつも心に思うことは教養撫

育の恩師藤田善信老師の慈悲と、長男の私を出家せしめられた両親の底知れぬ慈愛と悲痛の心持ちであります。ことに信心深かった母の慈愛であります。私は祖山に参りましてから間もない頃、此度の歌碑の歌、

ふるさとかへりみすれば草餅を

作りたまへる母にてありし

という歌を詠んだのであります。拙い歌ではありますが、私にとって母の慈愛は仏の慈愛につらなり、草餅はお念仏であり、ふるさとはお浄土に通じます。母は大正十二年六月七日に五十八歳で亡くなり、来年在五十回忌に相当するのであります。此度の歌碑の建立は、その記念にも思うのであります。

歌碑除幕の日は母の命日である六月七日の前日が日曜日に当りますので、その日に行うこととしました。知恩院寺務所の当局に微行で行くことの領解を得て、同日午前八時五分京都駅発の新幹線ひかり号により、名古屋駅に向いました。駅には岡崎や名古屋に住む私の母方の従兄弟（いとこ）達や、生家の法立からは当主の英三、その子供達が迎えに来てくれました。自動車二台にて法立に行きました。京都を発つ時から雨で、法立へついた頃も尚降りつづいていました。歌碑の前に天幕は張ってありましたが、困ったことだと

思っていました。名古屋から私の父方の従兄弟達である渡辺家一族の人達も参会してくれまして、賑やかになりました。

渡辺家は松坂屋伊藤家の別家衆の内の一家で、私の父の弟が松坂屋に勤めておって渡辺家に迎えられ、長兵衛と名乗っていました。

昔は松坂屋の優秀な店員は別家に養子として迎えられる慣習があったと聞いています。戦前は桑名町に家があったので、父につれられてよく邪魔をしました。その時分、中学や小学校に通っていられた子女達も、それぞれ今は立派なる社会的地位を得ていられます。長男の信一氏は東京大学経済学部で創設せられた時に転勤せられ、先年停年で退職し、今は私立の中京大学の教授をしていられます。前の奇絶峽の歌碑の中で記しました浄恩寺の檀頭脇村義太郎氏とは東京大学の同期生で、また共に経済学部の教授をしていられた親しい同僚であります。二男の英三氏は当時の一ツ橋高商を出られたように記憶していますが、早くから松坂屋の本店に勤め、経理部長から専務を経て、今は副社長の地位にあり、松坂屋を動かしている人といわれています。法立の生家の当主も英三とっています。この地方の習慣として、生れた子供の名を付ける時に、一族の中で成功をしている人の名前をもらう場

合があるのです。生家の当主英三も、その一つの例なのです。高校を出てすぐ松坂屋に入り、今も同店につとめています。

渡辺家には前記二人の男の方の外に女の方も五人あり、皆良縁を得ていられます。そのうち四人は名古屋に住み、今日はその内三人が来て下さいました。戦争中、法立に疎開しておった人もあり、戦後こんなにそろって渡辺家の人達が法立へ来て下さったのは初めてのことでさうです。

歌碑の除幕を行う正午前には雨もすっかりあがって、奇蹟のような感じがいたしました。除幕の綱は当主英三の子供、安一、宗二の二人によって引かれ、碑の全容が現われました。碑は少し青味を帯びた自然石で、台座と共に当主英三が北陸の九頭竜川の上流で見つけて運んだものです。当主英三は登山家としても多少名前が知られているとのこと。洒水器（しゃすいき）を本山より持参し、開眼（かいげん）の作法をして回願をしました。その後、仏壇の前で母の五十回忌予修の簡単な回願をし、参集して頂いた方に私の母の思出を少し話をしました。生家の今の仏壇は渡辺家の桑名町時代のものを頂いたことです。今日集まった渡辺家の女の人達は桑名町時代の仏壇は戦災で焼けてしまったと思っていたのにと、懐しげに近くのぞきこんで拜んでいました。

庭さきは歌碑を中心にして整備せられたので、全く景観を一新しました。その庭さきでお餅をついて、つきたてのお餅を大根おろしや、ごまや、わさびの醤油をつけ立食する光景は、都会では味うことのできない野趣であります。新鮮なる野菜の数々で大喜びの中に一同会食をすまいました。

それから地下（じけ）のお寺了正寺というへ参り 昨年分家の墓として新しくこしらえた生家の墓へお参りをし、渡辺一家の先代や私の父の実家の杉村家の墓へもお参りしました。浄土真宗の門徒は、昔は遺骨は全部本山へ納めて、お墓をあまり持たなかったであります。近年はお墓を造る門徒も多くなり、この寺の境内にも新しいお墓が沢山にできています。私の幼少の頃は杉村家と岸家（本家）のお墓の外に

四、五基あった計りで、その内でも杉村家の墓が一番古く、形も古い板碑型になっています。以前は墓の側に榎（かや）と思われる古い木がそびえておったのですが、それはもう枯れて株だけが残っていました。渡辺の人達もこの墓へは初めて参ったといっていました。

私の歌碑建立を機縁として、親戚の人々が集まって下さって、楽しい一日を過ごすことのできたことを深く感謝いたします。自動車で名古屋駅まで送って頂いて、午後五時発の新幹線ひかり号にのって京都に帰りました。

母おもふ歌碑うちたててはらからの
あつまりうれし今日のひと時

阿 弥 陀 經 意 訳 へ 一 部

北海道 吉 田 定 久

巷間には色々意訳ものが流布していますが
読誦用として恰好のものは見当りません。
この穴を埋めたく思ったのが是れです。も
とより世間のトップクラス中を対象にした

のではなく、専ら底辺を対象としたもの
で、不備の点に付ては大方の御指導を切願
する次第であります。

是は六方段を終った次の節―舍利弗於汝

意云何―からです。
舍利弗 汝この経を
何が故に一切諸仏
所護念経と名付るや

舍利弗 善男善女人

かく一切の御はとけの

勧むる弥陀の名号と

この経の名を聞く者は

すべて（一切）の仏に守られ

皆菩提をも得ればなり、

この故舍利弗 汝等

釈迦のことば（語）一切の

ほとけの勧め（所説）を信ずべし

舍利弗 前の世にありて

願いを発し名号を

称（と）なえし人は悉く

すで（已）に彼しこに生れたり

或は今の世にありて

願いを発し名号を

称のうる人は悉く



今に彼しこに生るなり

或は来たる世にありて

願いを発し名号を

称のうる人は悉く

当に彼しこに生るべし

その生れたる人々は

菩提（さとり）を進めて退かじ

故に舍利弗もろもろの

善男善女 若し深く

信する心ある者は

まさ（当）に必ず極楽に

往かんと願いを発すべし

（流通分）

舍利弗

釈迦は一切の

仏の功德を不可思議と

贊（たた）えまつれば一切の

仏も拳（こぞ）りて我が徳を

不可思議なりと贊えては

次の如く のたまえり

『釈迦牟尼仏は為（な）し難き

行（ぎょう）を婆婆にて為し給う

婆婆は濁りの多き国

劫（こう）と見（けん）と煩惱と

衆生と命（めよう）との濁りなり

この二行省略しても可か

かかる中にて菩提を得

信することの難しという

弥陀のおしえ（法）を説き給う』

舍利弗 汝まさしに知れ

釈迦は濁れる世にありて

為すこと難き行を為し

菩提を得て後（のち）数々の

法（おしえ）を説きしも正しくは

悪して世間をあわれて

信することの いと難き

弥陀の法を説くにあり

これを甚だ難事とす

釈迦尊たずぬる人なきに

みずからこの経 説き終る

舍利弗及びもろもろの

弟子と世間のひとひと（天人）と

阿修羅等に至るまで

この説法が信じ受け

各々礼して座を去りき。

〈特集〉

經濟と仏教



法然上人の經濟思想

友松 円 諦

(東京神田寺主幹)

1 法然門下の經濟研究

大正大学の前身宗教大学を卒業した頃というのだから大分昔の話であるが、当時、望月信亨先生が御健在で御指導を頂いていた頃である。私が卒論に選んだものが、こともあるうに、「法然及び門下の經濟的研究」というのである。その論文はいまはどこにどう成っていたのか知らぬが、行衛不明で却って幸いである。何を材料としたものか、せいぜい、玉葉か、東鑑位を参考にした程度で今から見れば卒論の名にふさわしいものではないと思うけれども、一応、法然上人の私有財産とか、どうやって生きていられたとか、戒をさずけて生

活をしていられたことが玉葉に手に取るように出ていることや、弟子達の中には禪勝房のように番匠をいとなむもの「作仏房の如く染物などやうのものを売買して命をつくはかりごととしけり」(勅伝二〇)というような材料を出した記憶がある。処が何しろ、貧弱な私の卒論である。先生のお氣に入らぬのは当然であった。さてそれから何年たってからであらう。昭和七年「仏教經濟思想研究」第一巻が出来たとき、欧州留学から帰朝の御挨拶もかねてうかがったところ、今度は先生の方から破顔一笑、「寺院所有の問題」を御覧になって、「これこそ、学問である」とおほめをいただいたのである。これから書こうとする法然上人の經濟思想もただ勅修御伝に

どう出ているというだけでは望月先生の印可がいただけない筈である。一応、仏教そのものに於ける衣食の立場というものを吟味して法然上人のとられた独自性というものを考えて見たいと思う。

2 釈尊の中道思想

仏教の中から経済思想をたぐり出そうとするには、どうしても、一応、釈尊の中道思想を辿らねばならぬ。これが水源である。「一切衆生はみな食に由りてその生命を存す、食ありて便を存し、食なければ便を失ふ」(1)とは原始經典にくりかえす処、出曜經(2)にも「食に非れば生命は救はれず。何れか能く揣食せざらん。それ食を立つるを先きとなす、然して後、乃ち道に至るなり」の一句を詳細に説明している。この合理的にして常識的な聖句は空海の性靈集にも見るところである。この聖句は若き釈尊の修行時代、とくに、その苦行生活を清算して、初めて中道に目ざめられた体験からにじみ出た言葉であろう。仏伝の記録する処によれば、若き釈尊はその初め苦行こそ出離の道なるべしと信じて、つとめて肉体を苦しめんとて日に一麻一米を口にし六年に及んだのである。しかし、かくして得たるものは唯肉体の衰弱と疲労のみであった。かくてその非を語って一人の村女の供養ける乳糜

を口にせられた(3)。かくして、次の如き体験をえられた。「げに、われはかの苦行より離れぬ、げにわれは甲斐もなき苦行より離れたるは善きかな、不死を願ふいかなる苦行もすべてかひなきことなりとわれは知れぬ。陸舟りくふねの舵かじの如くすべて得ることなかるべし」(4)ただ肉体を苦しめること自体が何かの宗教的功德になるという当時の極端な、不合理の宗教思想に抵抗されたところに釈尊の中道思想の特色があった。

- 1 増一阿含經(大正二、五六五、a)
- 2 出曜經二三(大正四、七三四)
- 3 〃七
- 4 相應部一ノ一

こうした中道思想の出現があつてこそ、そこに極端な苦行主義、禁慾主義、ひいては、人間性の滅却というところまで行かずにすんだのである。後年、釈尊教団を一時的にせよ、分裂の危機に陥し入らしめた提婆達多の言行なども、「比丘らを終生林住者たらしめ、村里に入ることなからしめ、終生乞食者たらしめ、招待をうくることなからしめ、終生糞掃衣者たらしめ、居士の施す衣服をうくることなからしめ、終生樹下住者たらしめ、屋根ある家に入ることなからしめ、終生生魚肉な嚼ふことなからしめよ」との主張も釈尊のおだやかなものに對して極めて激しい一方的のものであつたところに、禁慾主義がただよつていたのである。釈尊はこの点につ

いて余りやかましい制限を加えていられなかったようである。処が、提婆の徒は法顯、玄奘入竺当時のインドに於ても一部の寺院に於ては提婆の伝統を守るものが残っていて彼らは、釈迦文仏を礼せず、乳酪をのまなかったことを記録しているほどである。そこに彼らが中道思想を見失っていることに気づくのである。

3 法然上人と中道思想

法然上人が並々ならぬ学者であられたことは諸伝の等しく記録する処であるが一つ中道思想にかぎって考えてみても、各宗の祖師方を通じて、これほど、中道というものを自分のものにされている方はあるまいと、私は考えている。たとえ提婆がここで問題にしている魚肉の問題にしてからが、正統仏教律に於ても「見聞疑」の三不淨をさけることを条件としてこれを許しているのである。法然上人にいたっては、さらに一步をつき破ってこういつている。「又人々後世の事申けるつるでに、往生は魚食せぬものこそすれといふ人あり。或は魚食するものこそすれといふ人あり。とかく論じけるを、上人きき玉て、魚をくふもの 往生をせんには頼ぞせんずる。魚くはぬもの、せんには頼ぞせんずる。くふにもよらず、くはぬにもよらず、ただ念仏申もの往生はするとぞ、源

空は知りたるとぞ仰られける（勅修御伝翼賛廿一）全く一刀両断である。しかも、そこにはウィットとユーモアさえたたよっている。魚を食う、食わぬ、そんな末梢の処に力を入れる必要はない。中心は仏道にある。もつとはっきり中道を示しているのは次の一句である。「歌よむは罪にて候か。答、あながちに得候はじ。但罪ともなり、功德となる」簡にして実に要を得ている。中道の核心をついているといえる。当時、「歌」といえば、相聞、恋愛のうたにきまっていたのである。先づ一般に仏道のさわりになるものと思われていたであろうのに。法然上人はすべてそうした偏見から離れて、功德と罪の二辺から離れて、是を是とし、非を非とせられ、歌によつては、功德の歌ともなり、罪の歌とも成ると答えている。歌そのものは二辺をのりこえている中道であることを明らかにしていられる。

4 所知所領も念仏の助業

「現世をばいかかはからひ候べきと、上人の玉はく。現世のすぐべきやうは念仏の申されんかたによりてすぐべし。念仏のさはりにならぬべからん事をばいとひすつべし。一所にて申されずば修行して申すべし。修行して申されずば一所にて申すべし。ひじりにて申されずば在家になりて申すべし、

在家にて申されずば遁世して申すべし、ひとりこもりて申されずば同行と共行して申すべし、共行して申されずば、一人こもりて申すべし、衣食かなわずして申されずば他人に助けられて申すべし。他人の助けにて申されずば自力にて申すべし。妻子も従類も自身たすけられて念仏申さんためなり。念仏のさほりになるべくはゆめゆめもつべからず。所知所領も念仏の助業なくば大切なり。妨げにならばもつべからず」(勅修御伝四十五)この一文によって明らかであるように、上人にとって、一所に止住するのも、修行するも、在家するも、出家するも、妻帯するも、せぬも、遁世するも、同行と



五〇〇年前前には地球が丸いという事すらわからなかった。しかし今日では人間が月に飛んで行き、月の石を持って帰ってくるということで、科学の進歩は驚くべきものがあり

経 済

共行するも、衣食を他人にたのむも、自力でまかなうも、妻子従類の助けをうけるか、うけぬかも、所知所領をどうすかも、自分の念仏生活の妨げになるか、ならぬかが中心である。もし、少しでも妨げになるのなら妻もめとらぬがいいし、遁世するもいいし、遁世せぬもいいし、中心は自分の仏道次第である。衣食とか、経済とかいうことは二の次ぎであるというのが法然上人のお考えのようである。道心あるところおのづから衣食ありときいている。法輪転ずるところ、食輪転ずるとかや、念仏の声するところ、いづれや、衣食の伴わむるところやある。私はそう信じている。

仏 教

田 中 経 人

〈リヒト産業(株)社長〉

ます。それに引きかえ精神文化はどうか、一〇〇〇年、二〇〇〇年前と余り変っていない。お釈迦様の生れたときと、今の道徳律は大して変っていないといわれます。今欧米では東

洋思想を見直そうと、非常に興味をもたれております。仏教の經典に繰り広げられた真理は実に広大無辺で、説くとも尽きることはありません。

私は田中塊堂先生に字を習っており、もう十数年になります、ある時先生が、田中さん写経をおやりなさい、大変良い事もありますし、下手な座禅を組むよりよっぽど無念無想の境地にはいる事もできます、又必ず字は上手になりますから、とすすめられ、先生にお手本を頂き十年程前から書き出しました。

初めの間は字を間違えたり、行を飛ばしたりさんざんでしたが、やっと百巻を書き終えて先生に見せましたら、百巻で終りですか、もっともっと書きなさい、それから毎日書きなさい、そのうちにあなたの心構えが変わって来ますから、といわれました。それまでは三日に一卷とか一週間に一卷と般若心経を書いていたので、その後は割合に日を詰めて書く様になりました。その後昭和三十九年の不況時代になり、私の会社もご多分に洩れず、二進も三進も行かなくなり、銀行は金を貸してくれないだけでなく、前に貸した金を返せといってくる。一度は会社を解散しようかとさえ思った位です。この時代は有名な松下幸之助さんでもナシヨナルの本部長として、再び大松下の経営に当られた時です。

その時によし写経をみっちりやろうと決心して、それから毎朝五時に起きて沐浴して約一時間一生懸命書きました。雨の日も、風の日も、お正月も、盆も、旅行しても矢立を持ってホテルの部屋でも書きました。今年の五月ロータリーの世界大会に参加しましたが、その時に地上三万尺、ジェット機の上で一卷書き上げました。色々な会合で熱海や有馬に遊びに行つて、前の晩にお酒を呑んで騒いでも翌朝五時には、こっそり起きてお風呂に入つて体を清めて、廊下の小さいテールで写経をしました。ゴルフ場のロッジで書いた事もあります。写経のお蔭がその後事業は順調にのびて行き、現在では資本金三億円となり大阪証券第二市場に上場しております。

ほんとうに真剣になつてお写経を毎日一卷づつ五〇〇巻から千巻を書き上げられたら、たいていの目的は達せられます。結婚して八年間子供の出来ない夫婦の人に、何とかして子供が出来ないだろうか頼まれて、よしそれでは夫婦で毎日般若心経をお写経しなさい三百巻位になれば大丈夫かなえられますからと申上ておりましたら、先日その宅様からどうやら赤ちゃんが、できるとの事で、私も教え甲斐があったと喜んでいます。お写経の功德は大したもので、私の経験しただけでも素晴らしい事が沢山あります。

四年程以前に私の本社ビルを新築しました。平面積が約二百坪、五階建てですから千坪のビルです。色々な物を入れると千二百坪位になりますが、そのビルの新築工事に対して、私は白い丸い石三百組程を入手して一石に一字般若心経を書いて建物の中央のコンクリートの柱の基礎に打ち込みました。

それから約八ヶ月程たって立派にでき上りました時に、その建物をお願いした建設会社の社長さんが、不思議だ、不思議だと申されますので、何が不思議ですかと問うと、今度の工事はケガ人一人も出さずに無事故でできました、お経の力は実に偉大ですね、といわれはじめてお経の心髄にふれた気がしました。その後その建設会社から頼られて大体三億円以上のビルに写経の石を書いて入れております。

今日まで十数棟になりますが、未だに全部無事故で完成しております。写経についてのお話は限りがありません。東京の紫雲荘の橋本先生も私の写経の恩人です。

お経とはお釈迦様が長い修業のあとで、悟りを開られ亡くなるまで四十数年の伝道教化のお話を、弟子たちが書きとめて伝えたもので、きわめて平易な質疑応答式で書かれており、相手の考えが誤っていても、叱ったり否定せずに、話しているうちに相手の自覚を促すよう、たんと引つ張って、自分の説に入れていく、むづかしい道理を説く時

は、相手に応じて臨機応変に適當な比喻で、ものの真相を自然のうちに会得させてやる、といった懇切に説かれてあるという事です。

日本に伝ったのはインドから中国を経て、漢文に翻訳され、その数実に五千数百卷という甚大なるものであり、大般若経六百卷のように、空の思想をといたもの、王道をといたもの、臣の道、師の道、夫婦の道、あるいは災害を防ぐ道、国を守る道、法律を説くもの、寿命長寿、父母の恩、医療、施薬、ことごとく皆このお経に説かれています。春風駘蕩たる華やかなものもあれば、幽遠極まりない禅の境地もあり、秋霜の淋しさもあれば、修養の道を説いたのが經典であります。

経文の中では至る所に、もしまた人ありて經典を受持し、解説すると共に、これを書写すれば良く大願成就すと、法華経の法師文、道行般若経、放光般若経、首楞嚴経等々の大乘經典には皆ひとしく写経の功德が説かれてあります。

戦後強調されて来た西洋の物質文明によって、わが国の持つ伝統の美風が次第に忘れられて行く傾向があります。写経においても、現実には漢文で綴られ読みにくい、何が書いてあるかわからぬといった事とか、筆で書くことが億劫がられています、心を引き締めて、明窓浄机で写経三昧の境地に

入られる事を、おすすめします。たとえ三十分でもよいお経を書く事によって満ち足りた心、そうして精神的な、うるおいのある明るい生活に入る修養として写経をおすすめします。

写経は清浄心を養う浄業であるから、一字でも二字でも一行でも十行でもよい、清澄な心が、少しでも長く持続するために、修業であると共に日常の経営上、又他の人との応接対談の秘訣でもあります。

何のお写を書くか、私は般若心経が一番良いと思います。

これは釈尊が四十数年に渡って語られた、経文のエッセンスであり、最も短く最も良く読まれています。般若心経は、弘法大師も、文は一紙に欠け、行は則ち十七、謂べし、簡にして要、約して深しと、全くこんなに簡単に、仏教の真意を尽くしたお経は、ほかにないのです。古来宗派の別なく一般にひろく信仰されています。梵本が印度から中国に入り、大月支圖の支謙という人が、蜀の時代に初めて漢文に翻訳したと伝えられています。現在では十一種の異本があります。本文十五行偈文一行で二六二字、内題の摩訶般若波羅蜜多心経と奥題の般若心経を加えて二七八字であります。

皆様は東京の能率短期大学の上野陽一先生（初代校長創立者）の名をお聞きになった事があると思いますが、この方は

トップマネージメントの発案者ともいえる人です。この方が仏教という御自分の著書で般若心経の事を書いておられます。その訳文の最後の羯論羯論という箇所を、ゆきゆきて、おちつく先は花の山、と書いておられます。山田無文先生は、先き先きて彼岸に行き、すべての者彼岸に到達せるさとの成就と申されています。

この一文をお読みになったのも何かの仏縁だと思いますので、どうか皆様方写経をおはじめ下さる様念願します。

== 小さな宝物 ==

三才になる甥は、自分に与えられた玩具は決して他人に貸そうとしない。そのなかでも汽車のプラモデルは大のお気に入りらしい。ある時、遊び友人の子供が、自分のもっている乗用車をさげて来、交換に汽車を貸してほしいといった。しばらく考えていた甥は玩具を交換し、しばし無邪気に遊んでいたが、母の「ご飯ですよ」という声を聞くと、友のなくのを尻目に、その汽車を取りあげ、自分の玩具入れにしまってしまった。

昔より物々交換は人の考え出した最初の経済理念であるが、子供たちはこの遊びのなかにも、そうした氣質を自然と身につけているのである。こうしたところから、後の複雑な経済生活の基盤が生れ育つ訳であるから、私たちはその子供心を正しい方向に導かねばならない。これが強いては私たちの豊かな生活に結びつくことであるからである。



仏教と経済行為

—その原動力である健康問題について—

中原直治

(東京町田市在住)

今文具界でリヒト産業と言えば、知らぬ者がない程です。私はパイロット万年筆の販売員、田中さんは、当時パイロットの製造元並木製作所の関西総代理店福井商店の店員であつた。今となつては大変失礼ですが、当時経さん^{きんさん}と皆んなから親しまれた好青年でした。

今回不図も仏教と経済という題に於て、実に四〇年振り、仏縁の摩訶不思議をつくづく感じます。リヒトの蔭に写経のある事を知りました。それも一時的のものでなく、忙しい社業の中にあって、毎日心経一巻の写経よく十年を続けられる。だるまの面壁九年より長朝となった、誠に驚歎の外ありません。

そえにはまた勝れた健康のある事を信じます。田中さんは写経で目覚ましい躍進を遂げられております。水心五則で毎

日水を五訓^{ごくん}々と呑んでいる私の方は、今のところお金の方には、さっぱりです。水の中にも仏心ありとして、戦後二十五年間、毎日呑みつづけております。(本年二月号に寄稿、水と念仏と題して)

そのためでしょうか、私の健康は抜群です。現在七十一歳ですが、毎月信越国境を往復しており、宅に在りては、発展途上の街の小使をしております。(四百戸毎年七一八〇戸増)自分には一銭にもならぬ仕事に精も魂も打ち込めるのは健康のお蔭、即ち水を念仏として呑むところから得られたものと思います。

先日町内の盆踊り大会の催し、仮装行列に参加して個人賞一等、地上八〇厘の竹馬に乗り火の神となつて、火災予防を祈念したのである。特賞に寄附した、万年筆が私の手元に戻

る事になる。竹馬は六〇年前に覚えた遊びであり、みんなをアット言わせましたよ。

兎に角仏教に従って行う経済行為と、そうでない行為との

人が動くを書いて、働（はたらく）と読ませた古人は実に偉いと思います。又働くくらい人にとって大切なものはありません。一般の動物が、いくら動きまわっても働いているとは言えません。先づ大部分の人は働かないではその生活はなりたたぬのが今の世の中の仕組であります。つまり経済生活の始りであります。ただ何等の目的も意味もなく働いたのでは、是又本当の働にはなりません。働くということは、勿論自己の生存のためであるには相違ないが、人はその働くことにある種の信があつて働かねばならない筈である。

間には根本的な相違のある事を信じたい。実例は枚挙に暇がない。

業有信 の生活



= 東京港区高輪在住 =

大久保 文 雄

（写経田中経人氏の紹介者）

今、自分が働くのは、ただ自己のためのみではなく、自己を含め広く一般世間の人のためにでもあるという信念悲願がなければ、働くことの本当の意義が見出されず力もでない。自分が、ここに生きて働くということが、そのまゝ一切を生かし万物を生長させる一動力とならねばならぬ。一口に経済活動と言うときには、そんな哲学的宗教的な考えをもつものは少いであろうが、ひそかに、これを仏教の上から考えて見れば、その間に深い深い理趣のあることが解るのである。私どもは、まづ職業をもち、その職業遂行にあたって上記

經濟と仏教

の如き信仰を基礎として働くことがもつとも肝心であり、又真から喜び働く境地になるのではないかと思う。私はかかる信ある業務生活こそ仏教の教うところと信じます。また、ひろく人々の利益や幸福に資するところとなると思う。けれど真理の追求とか、問題の解決とか、あるいは「さとり」とかを目指す出家主義の仏教ではなく、洵に大乘仏教の立場こそ我等の經濟生活の内にその意義を見出すことと相成る次第である。即ち大乘の信ある業務生活に行われる私どもの一息一息、一挙手一投足の働きの中に衆生済度ともいえる理想信仰をもちゆくことにこそいとも重大なる意味があるのである。資生産業は仏道は法華經の教うところ、一心即一切法、一切法即一心の境地が現成すべきである。この自覚なくしてただ働くのであっては、あらそい、奪い合い、憎み合い、の世界はいつまでも続けばかりで、所謂眞の平和共生の世界実現はほど遠く、エコノミックアニマルの、そしりまぬがれぬものと思う。

さて業務生活や仕事に、かかる深甚微妙なる意義を感じ喜

び働くことのできるのは、浄土教にあつては、念仏のうちに働くことに外ならず、有信有業の生活が我等の最も理想とするところである。經濟と仏教もかく相成るところに始めて合致する處が現われ、又現わさねばならぬ。そもそも往生というも成仏といふもの外には無いであらう。更に進んでは三世諸仏の護念したまうところでもあらう。

先頃惜しくも他界せられた芝増上寺の椎尾弁匡大僧正は、共生の大義をかかげられ有信有業を常に語られた事も実によるところがあつたのである。南無阿彌陀の内に職を守る必要とも言われた。殺さざる生活、盗まざる生活、無駄せざる生活、欺かざる生活、酔わざる生活は素より仏教の重視する条件であるが、又一般産業生活、經濟も、信のともなうことによつて始めて往生の因となるであらう。尊きかな有信有業の生活、わが業務生活を日々に改善し進歩させて衆生往生に到りゆく事が私どもの本願とも申すべきでしょう。



女 人 往 生 (19)

法然上人は、罪深いとされていた女性でも、念仏を称えることによつて極楽に往生できることを力説した。今まで聞きなれないことだけに、すべての女性は生きる力をえ、涙を流して喜こんだという。こうして上人のもとをたずねる女性が増え、元久元年（一二〇五）には、身分の低い尼女房あまのむすめにまで授戒されたことは有名である。

後白河院の王女式子内親王などは早くから上人についてた熱心な念仏信者であつたし、九条兼実の娘宜秋門院も、上人のありがたい教えに接して帰依した一人。その他

の人のにおいてはなおさらである。



法然上人の健康 (20)

「絵巻」「画像」「木像」などから受ける法然上人の健康は、デッブリと肥り、一見丈夫そうに思われるが、見かけよりは弱い体質であった。ご法語の中にも病氣に対する記事が見られるし、よく風邪はめされていたらしい。建久九年には風邪がこじれて遺言状まで書き、元久元年ころにはマラリヤまでわずらっている。しかし、こうした大病が上人により以上精神的な栄養を与え、弟子たちの団結に大きくプラスになっていった。凡人の病氣とは異なり、上人の病氣には、計りしれない価値を見出さなければならない。

松濤 達文 絵
玉山 成元 文

へかんなづきの巻

虫声白露に埋もりといった気配はさらさら見られぬ東京の真中だが、ゴキブリ君の姿を見かけるのが間違になるにつれて、どこでわいたか生れたか、蟋蟀（こころぎ）の声などが聞こえてくるから不思議である。公害の中を持ちこたえて来た木々の葉も一雨、一風ごとに舞い落ちて、わが寺で唯一の大木、公孫樹もここ三日程の間にすっかり黄色いセーターを脱ぎ捨てて、秋風に枝を鳴らし始めた。

さて、

他の宗派のお仏壇にはよく宗祖、お開山さまなどの像がおまつりしてありますが、浄土宗のお仏壇では阿彌陀さまだけでよいのですか。

なかなか厳しいご質問で、私のような専門でないものがお答えするのは些か躊躇されますね。それに浄土宗の



（二松学舎大学講師）
浅草西光院住職

若林 隆光

お仏壇でも、気のつく仏具屋さんでお求めになったものには、ちゃんと、元祖さまと善導さまのお絵像などをつけてくれてあります。

浄土宗の信仰がナムアミダブツのお念仏に帰することは今さらいうまでもありませんが、お仏壇が一家の信仰の中心であることを考えれば、そのご本尊さまは、阿彌陀さまだけで十分であり、やたらとお位牌を真中に置いたり、神社のお守りまで同居させたりするのは決してよいことではありません。しかし正しい信仰は、個人が自分勝手に発明してふりまわしたり、押しつけたりするものではなく、必ず仏教の本義にのっとり、伝統を受けついでものでなくてはなりませんから、その本義を教え、伝統を伝えて下さった方に尊敬と感謝を捧げるのは当然のことです。

お釈迦さまによって開かれた仏教の本義の正しい帰結が、口でナムアミダブツと唱える一行につきることを、はじめてわたくしたちに教えて下さったのが法然上人であり、それによって仏教がはじめてわれわれ大衆のものとなったところから法然上人が単に宗祖でなく、元祖さまとよばれることは誰方もご存知のことです。しかし宗祖が文字通りの元祖であつたら、浄土宗は法然上人のほしきままな発明になつてしまつて、仏教の正統をつぐものとはいへません。元祖をして真の元祖たらしめたものは、インド以来の仏教の伝統を元祖さまに伝えて下さつた中国の善導大師さまです。実際に善導さまと法然さまが、歴史的事実としてお会いになつたわけではありませんが、法然さまは事実以上の事実として善導さまにお会いになつたと確信し、伝統の上に立つた正しい信仰を証明されたのです。世に「二祖対面」といわれることで、このこと自体の意義についてはまた考える機会もあるでしょうが、お仏壇にはこのことの象徴として、元祖法然上人と善導大師のお像を、阿弥陀さまの両脇におまつりして、日々尊敬と感謝の意を表わすのが当然です。

わたくしたちが、日常自明のこととして信奉している真理、一ブラス一は二という真理を取上げて見ても、い

かにも簡単なことの様でありながら、生れたときから親も、先生も、先輩も全く無しで育つたら、身についたものにはなり得ないものです。赤ん坊のときから狼に育てられた狼少女の話はその証拠です。こんな日常の真理でさえ、いや日常の真理であればこそ、その大切さは愈々増すもので、わたくし達はその伝統の教師の恩恵の大きさを反省してみたいくらい感謝しても、し切れるものではないかもしれません。そしてその人生の最後のより処となる念仏の真理を教えて下さつた法然上人、善導大師のご恩は、更に更に限り無いものといえましょう。

お仏壇には阿弥陀さまだけでよいのかというおたずねのお答えは自ら出たようです。そして附け加えるならば、阿弥陀さまという無限の救済の力を持つておられる仏さまでさえ、観音さまや勢至さまといったわたくし達に親しみ易いボサツさま方を両脇に従えておまつりすることが多いことに気付いて頂きたいと思ひます。

さてお宅のお仏壇はどうなつていますか。静かな秋の一日、とっくりとお仏壇をながめ、汚れているところはきれいにお掃除し、理にあわないものは片付けて、家中の感謝と尊敬が自然に集まるよいお仏壇にして下さい。

孝子善之丞物語

《第三回》

吉 田 光 覚

(岩手県紫波・極楽寺住職)

(1) 火繩の目覚まし時計

宅より八幡神社までは十四町、そこから薬師堂へ一里、更に観音堂へ七町の三所へ毎夜丑の刻参りが始まった。一心は岩をも通すのだが、終日の労働に疲れ切った眠たいさかりの青年には、うっかり目を覚ませばもう夜が白むことが間々あった。「切角、神仏に誓いを立ててこんなことでは」と善之丞は強く自己の怠慢を責めた。

目覚まし時計のなかった時代である。丑の刻参りのことはそと母にだけは明かしていた。でも母とても同じこと、疲れきって真夜中に目を覚ます筈がない。目を覚ましたとて伴の健康を案ずれば起す気にもなれないのが

母心である。

善之丞は考えた。そうだ。こうすればいい。いつもいるりの傍に寝るので火繩を手首にむすんで一方に火をつけ、刻限がくれば手首に届くように工夫した。何たる孝心、何たる信仰の権化であろうか。「今時の若い者は珍らしい。見上げた感心な若い者だ。」部落中の評判息子ではあった。

(2) 変化の出没

八幡さまより日課念仏を授かってからは高声にお念仏を唱え乍ら歩いた。かくて二十六日の夜の事である。薬師堂から観音堂への途中、産ヶ沢という所がある。二Mほどの堰が流れている。現在は高速道路の架橋工事が進

められている。ここにさしかかった際、背後から「善之丞、善之丞」と大声がした。伝記には次のように記されている。

「其声半田山にこたえ、大木の數百本も倒るが如し。恐れおどろきてふりかえり見れば其丈八尺余りの赤鬼青鬼の間一町ばかりに追い来りぬ。肝魂も消え失て道のほとりにたをれ臥けるが、しばらくありて人心地いで、首をもたげてあたりを見れば何ものも見えず成ぬ」

善之丞はつくづく思った。こんな恐ろしいことではもはや毎晩お詣りもむずかしい。一層中止して引返そうか。だが切角の大願を成就しないでしまうのも口惜しい。やっぱりお詣りして行こう。心をとり直して観音さまにお詣りして明方わが家へ戻った。

二月二日の晩、薬師堂から観音堂への途中で今度は齡八旬とあるから八十歳位の山伏が一人忽然と現れて、

「汝父が重病をかなしみ毎夜三所に参る事たぐいなき孝心なり。弥々信心怠らずば所願成就すべし。」などと色々きかされたあとで、「我は是山神である」と名乗られると、忽ち



＝火繩の目覚し時計＝

一陣の風が来り、雲を吹上げ草木震動したと思ふやお姿が見えなくなつたという。

六日、観音堂に通夜をした寅の刻には長さが軒端に届くような恐ろしい男が八九人来て、中の一人が大音で「ああいい喰物がある。明日の晩は必ずとって喰わう」叫んでお堂を巡つた。するともう一人が「貴いお念仏を申しておれば何ともすべきやうがない」と

ささやく。皆が歩む足音がお堂をゆするよりにすさまじい。善之丞は震え乍ら堂内でお念仏していた。

又或晩は観音堂の境内で大きくうなる声がある。よくよくみれば頭は牛の如く、五間ほどの翅のある者が三ツ口から火焰を吐き羽ばたきして堂中に向つてやってくる。善之丞は恐れおののいて高声で念仏申すと其物音まもなく消え失せたという。

(8) 母と別れの盃

善之丞はこう毎晩のように参詣の都度、恐ろしい目に会うのでは自分はきつと命をとられるであらう。恐らく今晚は母と最後の別れになるかも知れぬと思うと、涙が止めどなく溢れてきた。そうだ。父の病氣を直して貰えんなら命なんか惜しくない。白石へ行つたときも死を覚悟した自分だ。もしこれから命を奪られるとすればせめて母と別れの盃を交そうと決意して、銚子に僅かの酒を入れて母を起しに行うとした。するとこは不思議、さわりもしないのに徳利が倒れて酒がすっかりこぼれてしまった。善之丞は詮方なく、只だま

つて母を見遣り乍ら涙を浮べて家を出た。母は気付いて善之丞のあとを追いかけて、参詣を思い留めようとしたが、善之丞はきき入れずにお念仏を唱えながら八幡さまに向つた。そしていつものように薬師さまに祈願し、ついで観音堂に通夜してお念仏唱えていると、結構な乗物二丁に供人三十人ほどがやつて来てお堂に上つた。すると堂内は白昼のようになつた。

乗物からは女性二人が出られた。一人は三十歳位、一人は十七八歳位、善之丞は地頭の奥方ではと思ひ片隅にかしこまっていた。やがて三十歳程の女性「善之丞、善之丞」と呼ぶ。善之丞は恐る恐る顔を上げると、

「汝父が病を歎き夜な夜な怠らず参詣する孝心の程はむるに言なし。疲れを慰めん為酒を与うべし」と宣えば、十七八の貴女、見事な銚子に盃をそえて持つてくる。善之丞は切角の志、遠慮するも失礼と思ひ盃をおし戴き、三献まで飲みほすに、其味、天の甘露もかくやと思ふほどであった。しばししてお酌の女性、さつと立上り、面白く舞をみせてくれた。

十夜法話

山本 禄 瑞

(千葉県木更津市選択寺住職)

野の道や 十夜戻りの小提灯

子規

俳人として親しまれている子規のお十夜に因んだ一句です。

お十夜法要に参詣し、法話も聴聞し法悦にしたったスガスガしい気持ちで、夜道を小提灯に照らしながらいそいそと帰宅する姿が目に見えます。

お十夜の法要は晩秋から初冬にかけて、全国津々浦々の浄土宗寺院でおつとめする大事な年中行事の一つです。十夜法要がこの実りの季節に営まれることに深い意義があるものと思えます。

花咲く春に宗祖法然上人の御忌が奉修され炎暑の候にお盆、お施餓鬼の法要がつとまり夫々について宗教的な深い意義が秘められていることは申すまでもないことですが、お十夜については次のような因由に発していることを申し上げて見たいと思います。

▽十夜の意義について

浄土宗所派の經典である、浄土三部經の中に無量壽經と云う尊いお経があります。その中に、

「此に於て、善を修むること、十日十夜すれば、他方諸仏の国土において、善を修すこと千歳に勝れたり、故はいかに、他方の仏国は善をなすもの多く、惡をなすものは少し、福德自然にして造惡なき地なり」

云々と言うお言葉があります。

この中の十日十夜と云う言葉が十夜法要をおつとめする元となつてゐるのです。

私達は日常の生活で善いこと、悪いことぐらひはハッキリ解つていながら、なぜか善いことはしにくい仕組になつていて善行は永續しがしないのです。ところが悪いこととなると知らず知らずの間に身についてしまひます。

善いことをするように教え諭されながらも縁遠くなるのがこの世の習いであります。

時にはせめて今日一日だけでも一切の悪いこと、悪い思

い、悪いすがたから離れようと心がけても、いつしか心の何処かで悪い企らみが頭をもたげて来るようです。

「この世に於て善を修めること十日十夜すれば、他方仏国土に於て善を為すこと千歳に勝れたり」

とはまことに至言であると思います。

たとえ一日一夜でも悪から遠ざかる生活の尊さが、この経文の一節ににじみ出ていることを教えられているのであります。

▽人の性は善

人間の性は善であるとか、悪であるとか論議されていますが、私は人の性は善であると信じております。と申しますのは私はここ二十余年刑務所で教誨の仕事に従事し、人をあやめた経験者と話し合う時をもつものですが、これ等の人々と接して感ずることは、どの人も実に個人的には素直で親切な人達ばかりで、どうしてこのような所に来なければならなかったか判断に苦しむものです。結局は社会にあった時、貧、瞋、痴、の三毒煩惱の囚となつて発作的な迷がこうした結果を招いた憐れむべき人達と残念に思うものです。

今の世の中で公的な官庁で宗教的な情操を高める教育が行われているのは刑務所だけでしよう。

毎月教誨の都度係官から提出される「願箋」には被害者の

命日供養とか、肉親の年忌回向とか、先祖の追善とかをお願いしたいと申し出が記されている。受刑者一同と読経念仏を同唱した後志す靈位のご回願をするのが日課となつております。この中に懺悔があり、反省があり、謝罪があり、更生への意欲が炎え上つておるのです。

つらきこと多き一日無事に終え

疲れをほぐすお念仏の声

と歌った人もおります。

こうした心境になれば、彼等とも早罪人でありません。まさに妙好の善人であると思います。

▽十夜法要の濫觴

今から五百余年の昔、後花園天皇のみ代のことでした。足利義教將軍の執權職をつとめた平朝臣貞経という方の息子さんに貞国という非常に厚く仏教に帰依された方がありました。彼は人の世の無常を感じ、出家して仏道修行に励む決心をして、京都東山真如堂の本尊阿彌陀如来のみ前に三日三夜の専修念仏の行に入つてひたすら念仏三昧を修し満願の日の夜明け方を迎えたところ、一人の高僧が突如として現われ、「汝専修念仏の行を修し甚だ寄特のきわみなり、然しながら志す出家遁世のこと今三日の間待つべし」心だに立てし誓のかないなば

世の営みはともかくても

と一首の歌を示されたので、真国はこの不思議に感激して出家することを思い止まったところ、翌日公命にて父の家督を相続し、執権職を継承しなければならなかったのです。

爾来真国は公務に尽粹するとともに、一層専修念仏の修行に精進されておりました。

この話をお聞きになった後花園天皇は大変に感銘され真国に命じて、真如堂において更に七日七夜の専修念仏の行を修して十日十夜の浄業をつとめるようご指示があり、真国はつつしんでこれを奉修したのです。

その後、後土御門天皇は特に浄土教を深く信仰された天皇で、明応四年鎌倉光明寺第八世の法主観誓祐崇上人を宮中に召され、浄土三部経の諸議を聞召されたのであります。

その時後花園天皇の古事を偲ばれ観誓祐崇上人を大導師として、始めて真如堂の本尊阿彌陀如来を御所に奉安し厳肅なる十日十夜の引声念仏大法要が厳修され、ここに十日十夜の濫觴があったのです。

満願を迎え天皇は殊の外ご歡喜遊され、上人に所望あらば何人なりと賞与するとのお言葉があり、これに対し観誓祐崇上人は、

「この十日十夜の法要を鎌倉光明寺に遷し永く浄土宗の法要として奉修することをお許し願いたい」

と申し出たところ、天皇にはこれを嘉せられ群臣に勅して、「十日十夜の法要を鎌倉光明寺にうつし、永く浄土宗の法要となすべし」

と勅許を下されたのであります。

今日連綿として五百有余年を閱みする後世ま鎌倉光明寺を始めとして、全国津々浦々の浄土宗寺で厳修され檀信徒の皆さんから「お寺のお十夜」として親しまれておることを有難くも又尊く思う次第であります。

▽むすび

お釈迦さまは、

「此の土に於て善をなすこと一日一夜すれば、無量寿国に在つて善をなすこと百歳するに勝れたり、ここに於て善を修むること十日十夜すれば、他方仏国土において善をなすこと千歳するに勝れたり」

とお経文の中に示されていることは、一日一夜の別時善行、十日十夜の修善念仏が善縁となつて、惡を止め、善を作す（止惡作善）の業となり、己れを正し、人を導き、真実一筋にこの世を生きぬけよとの祈りをこめられた尊いお諭しと存するものであります。



道

黒谷への道

高橋良和

法然上人の立教開宗の地は、比叡山上西塔の黒谷である。この地を別所黒谷ともいい、また浄土宗では元黒谷とも称している。

元黒谷というのであるから、もう一つの黒谷があることがわかるだろうが、そのもう一つの黒谷は、京都市左京区黒谷町の金戒光明寺本山である。

であるから、この金戒光明寺のことを新黒谷とも称している。然し今日ではあまり新黒谷とはいわないようで、そうなると、元黒谷も黒谷と呼んでよいのかもしれない。

この黒谷の起りは、比叡山で念仏のおしえを開いた法然上は、承安五年いよいよ山を下りて念仏弘道のよき地を探がしたときに、たまたまこの地に紫雲たなびくところから、ここに足をとどめたといわれる。

比叡山をおりてくるのにはいろいろ道がある。西塔なれば青竜寺の門前の道をおりと、八瀬までつづく雲母坂であるし、西塔から東塔へ、そして京都への道をとると、北白川の弁天道がある。

もう一つ坂本におりる本坂があるが、法然上人はおそらくこの道におりたのではないと思う。なにも京都と方角ちがいの琵琶湖に向っておりる必要はないので、一ばん京都に入りやすい道は、この北白川の弁天道であると思う。

すると比叡からおりたところが北白川で、そこから少し歩くと、やや小高い丘が吉田山であり、それにつづいて黒谷があるから、まずこの道が黒谷への道といえるだろう。

この黒谷は当時、白河の禪房と称して、法然上人常在の説法のところといえる。法然上人はここから、知恩院の吉水の禪房に移ることになるが、それから後も、いつもこの白河の禪房に来ては念仏の法縁を結んでいたといえる。

そのように考えてくると、法然上人の念仏のおしえを大衆に最初に説かれたのは、この地であるといえるから、「浄土真宗最初門」の勅額が今もなお三門楼上にかかげられているのである。

黒谷は応仁乱で火災にあっているが、昭和になって、昭和九年四月十七日に大殿はじめ書院、庫裡が炎上している。この額のかかげられている三門は焼失を免れたのである。この三門楼上の額は、後小松天皇の宸翰であって、三門はそう大きくないが、高台にあるので、この「浄土真宗最初門」の大きくみえるようである。

この白河の禪房に法然上人が住んだとき、ここを訪ねているのに熊谷次郎直実がある。おそらく坂東武者である熊谷直実が、出離の道を求めて、この寺にやってきたのだろう。急な三門の坂道を、鎧をつけてのぼるこの坂東武者の姿を今想像してみるのである。

熊谷直実は、法然上人に会うためにやってきて、この禪房のところで、自分の纏っている鎧をぬいで、その本堂の前の松の木にかけたらしい。「よろいかかけの松」が今も残っていて、熊谷の求道の様子をつたえている。





この熊谷に縁りの寺院は山内にも残っていて、黒谷墓地の右側に小さな本堂の寺がある。これが熊谷堂である。その本堂の脇壇に、法然上人の画像があり、熊谷直実と、あの須磨ノ浦で、直実のために討たれた平家の公達である、教盛の像も安置されている。もう一つこの直実と教盛との墓が、墓地のなかにたてられているのは、源平の血なまぐさい争のことが思い出されるのである。

もちろんこの黒谷にも法然上の御廟があるが、この御廟も昭和九年の出火のときには焼失を免れたと記憶している。

最近この黒谷はすっかり堂宇を完成し、戦時中に復興を完成したが、焼失前と変りない大殿堂が出来あがっている。

書院の裏の庭園も出来あがった。廻遊式のもので、実に見事である。

この黒谷の重宝の一つに一枚起請文がある。もちろん法然上人の真筆といわれるものであって、四月の御忌会の際は、内拝を許されているが、そぞろ法然上人の御真影に接するの思いである。

そして今もなお黒谷一山の寺院に、法然上人が坐したという紫雲石が残っている。

この黒谷から真如堂につづく道は、静かな散歩道である。真如堂は十夜の発生の地で、今もなお十日十夜がつとまり、その期間中、引声（いんぜい）念仏という、節のついた念仏がとなえられている。

京都の町も変わったけれど、このあたりはまだ昔のままであるから、散策によいところである。

もう一つ忘れていたが、方丈の正面に閑院宮の筆になる「白河禪房」の文字の額がある。法然上人の昔をつたえているようである。

浄土宗の古刹を訪ねて

京都黒谷 金戒光明寺

京都岡崎には古寺、古跡が多い。しかし今でこそ料理屋やホテルがところ狭しと乱立しているが、地理的からして往古の清寂な地が想像される。しかもその中にある四万五千坪を要する黒谷光明寺は、何といてもその寺観はすばらしい。京都のタクシーの運転手仲間では「黒谷の本山」として通っていて、金戒光明寺といつても首を傾け、「わかりません」という。

現在の地を新黒谷と称し、宗祖が白河の禪房として居住されたとする古事を明す史料はないけれど、浄土宗の僧だけでない歴代の名前からみても、円戒相承の道場であったことが予測できる。何といつても十世等熙の活躍が同寺を普遍的なものにしたのである。けれどその尽力でできた壮大な伽藍も勅額も、応仁の大乱の兵火により焼土と化してしまったのである。幸いに識者を得てその復興がで

き、信長との関係（天正二年十一月の制状）や、天正十三年には秀吉より百三十石の寺領寄進があった。慶長十八年には家康も所領を安堵し、百三十石としている。

現在寺内に十万基にも及ぶ墓が整然とならんでいる。墓の一つ一つが当寺の発展過程を示しているようにも思える。教盛・直実の墓、また家康の室阿茶局や秀忠室崇源院の墓は、何といつても壮観である。中でも塔頭の西雲院の開基が宗敵（朝鮮人）で、文禄の役に捕われて入国し、以降中国・朝鮮などの帰化人などが、ここに弔られる場合が多かったことなどは、あまり知られていない。

江戸時代になって、特筆しなくてはならないことは、何といつても増上寺源誓存応と当寺の関係であろう。存応が門下のきれ者了のを当寺に送り込み、その勢力の京地での足場とした。元和六年卯月十八日付で、存応が黒

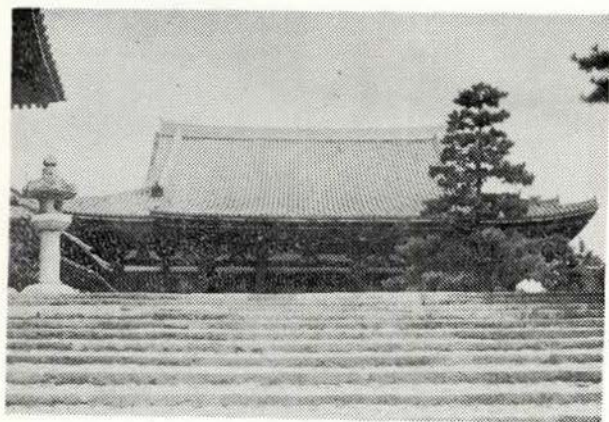
谷了のにあてた文書や、十月四日付の文書は、了のと存応の肉迫する内容もさることながら、京地での門下の活躍がうかがわれる。了のについて同門の政治家潮存などが入寺していることが、阿茶局や崇源院との関係を持たせ、家康を背景に当寺の地盤を、より強固にしたのであろう。盛時に三百三十の末寺を全国に配した原因であろう。

根本堂は明治の建立である。茶室や庫裡は種々の利用者が多い。何年か前、史料探訪に伺った時は友禅の展覧場に借してみえたが、黒谷の地ならではの、何ともいえない友禅の色を今もなお思い出すのである。

寺院には地理的要素を踏えて種々に造堂などが行なわれるが、同寺は城郭としての色彩が強いように思われる。やはり長い歴史へ、同寺が対処して来た一端をしのばせているようだ。

山門の「くろ谷」とかかれた石柱と、日本三文殊といわれる有名な文殊堂からみた洛中は、時々京都の中でも、何回訪れてもあきない不思議な魅力を持っている。

（田中祥雄）



〈本堂〉



〈境内〉

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 十月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十六年九月二十五日印刷

昭和四十六年十月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

“御年始のご挨拶がわりにご利用を”

『浄土宝暦』

- ・ 一部 25円 (200部以上より 単価23円)
- ・ 送料実費 B6版 40頁

『修養日めくり』

- ・ 一部 100 円 送料実費
- ・ 用紙33枚 タテ37cm ヨコ13cm
- ・ 見本お申しこみは150円お送り下さい

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三 碩 学
の 名 著 『浄土宗読本』 覆 刻 版

価 1000 円 丁 150 円

時代を越えて浄土宗の真髄を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

各々御用のむきは早目に本会へお申込み下さい。

東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番